東アジアの姓氏関連文献に対する総合的考察

新潟産業大学経済学部・金 光林

1. 中国の初期の姓氏関連文献と漢民族の祖先意識

中国の姓氏の構造は基本的に周代に確立された。そして中国の漢民族の大半の姓氏は秦漢以前の「氏」に由来している。

中国の姓氏の数に関しては、唐代の『元和姓纂』に1, 233個が収録され、宋代の『姓解』には2, 569個、明代の『万姓統譜』には3, 700個が収録された。1981年に北京出版社が刊行した『中国姓氏大全』には、5, 600個、1996年に教育科学出版社が刊行した『中華姓氏大辞典』には、歴史上と現代の中国の姓氏11, 969個が収録された。しかし、現代に中国人が常用する姓氏は約3, 000前後といわれ、その中で漢民族の常用姓氏は約500個程度だといわれる。

中国では姓氏の発生が長いだけではなく、姓氏に関連する文献も早くから現れた。春秋・戦国時代の『左伝』『国語』『世本』と西漢の司馬遷の『史記』などの書物に姓氏の起源に関する言及が見られる。その中でも、戦国時代の史官が編纂した『世本』が最も早く姓氏について体系的に記録した書物である。『世本』は、伝説上の人物黄帝から春秋時代の諸侯大夫までの氏姓、世系、居（都邑）、作（制作）などについて記録し、司馬遷の『史記』及び漢代の姓氏に関する文献の成立に影響を及ぼした。

漢代に至ると姓氏に関連する文献が増えるようになった。西漢の史游の『急就篇』、東漢の応劭の『風俗通・姓氏篇』、『風俗通義』、王符の『潜夫論・志氏姓』などがこの時期の代表的な姓氏関連文献である。

魏晉南北朝時代から隋・唐の時代に間にも姓氏関連の文献が多く現れた。南朝の何承天の『姓苑』、王儉の『姓譜』、王僧孺の『百家譜』、唐の許敬宗の『姓氏録』、孔至の『姓氏録』、林宝の『元和姓纂』などである。

東アジアにおける姓氏の形成という枠組みの中で中国の姓氏の特徴を捉えようと、まず、姓氏がかなり古い時代から形成され、東アジアにおける姓氏形成の先鞭をつけたことである。次に、漢字を用いる中国式の姓氏、即ち「漢姓」は中国人だけではなく、中国内及び周辺の異民族にも広く取り入れられたということである。それから古代中国の王族、名門貴族はその氏族の源流を中国の伝説上の三皇五帝に求めることが多く、姓氏が古代中国の伝説と関連しながら形成されていった。古代の王族、名門貴族たちがその氏族の源流を神話・伝説上の最も権威のある人物に求める現象は朝鮮、日本の姓氏の形成においても見られるように漢字文化圏の姓氏のほぼ共通した特徴だと考えられる。

中国の漢民族の姓氏の中でよく使われている120個の姓氏（大姓）が漢族人口の90.11%を占めると言われている。この120個の漢族の大姓の中で約90%以上はその由来を確認できるが、そのほとんどが中国の伝説上の三皇五帝に源流を求めている。ここで注目されるのは、明らかに漢族とは異なる異民族である匈奴、鮮卑までも記録の上では黄帝に源流を求めていることである。『史記』「匈奴列伝」に「匈奴、其先祖夏后之苗裔也」に記載されており、『新唐書』「宰相世系」に「黄帝生昌意、昌意少子嫫、居北、十一世為鮮卑君長」と記載されており、『魏書』にも鮮卑の皇族拓跋氏が黄帝の子孫であると記載されている。

古代中国の王族、名門貴族がその氏族の源流を伝説上の三皇五帝に求める傾向はすでに周代には存在していたと見られる。戦国時代の屈原の『離騷』が「帝高陽之苗裔兮、朕皇考曰伯庸」という句から始まり、屈原が自分の父が黄帝の孫といわれる高陽の子孫であると名乗っていた。周代に存在していたこのような意識は中国の姓氏に関する『左伝』『国語』『世本』『史記』『漢書』『潜夫論』などの書物によって記録され、以後も著述された姓氏に関する多くの書物によって継承されたと考えられる。中でも、司馬遷が著した『史記』では五帝や夏・殷・周に関わる伝聞や記録、伝説を一貫した因果関係を持たせて史書に組み立てたのであり、中国の漢民族の歴史観と祖先意識を決定づける重要な書物となったのである。

2. 中国の周辺異民族の姓氏と姓氏関連文献

中国人の姓氏、即ち「漢姓」はすでに周代の頃から中原周辺の異民族に受容されたことが中国の古代の文献から断片的に確認できる。東漢の末年には、漢王朝の和親政策により南匈奴人が漢語を話し、漢字を用い、漢民族の姓氏を取り入れて、貴族は「劉」「呼延」「卜」「蘭」「喬」「郝」などの漢姓を名乗った。

中国で漢民族と周辺の異民族の民族融合が大いに進んでいた魏晋南北朝時代に、周辺の異民族の中国式姓氏、即ち漢姓の受容が著しかった。まず、五胡十六国時代に中国の華北地域に進入した匈奴、鮮卑、羯、氐、羌など五胡と言われた異民族が漢民族の文化を受け入れ、漢姓を採用していた。南北朝時期には、北魏の鮮卑族が一段と漢化政策を進め、ほぼ完全に漢姓を受容した。北魏の文帝は鮮卑族の複音の姓を単音の漢姓に改めるようにし、496年に王族の姓氏を拓跋氏から元氏に改め、貴族層には丘穆陵氏から穆氏、步六孤氏から陸氏、賀頼氏から賀氏、独孤氏から劉氏、賀楼氏から楼氏、勿忸于氏から于氏、紇奚氏から嵇氏、尉遲氏から尉氏という八つの漢姓を創製した。

唐代には、北方の突厥の中に阿史那という姓を史という漢姓に改めたり、唐王朝の国姓である李氏を賜るものもいた。唐代には、南方の南詔国でも、蒙、孟、楊、段、趙などの漢姓を取り入れていた。唐代には西域の異民族が漢姓を受容した記録も見える。

唐代以降、五代十国、宋・遼・西夏・金・元へと王朝の交替と並立が繰り返される中で、中国周辺の異民族による漢姓受容の現象は引き続き行われた。遼の太祖耶律阿保機は漢の高祖を敬慕したので劉氏を名乗り、遼の太宗は契丹人の外戚に蕭氏を名乗らせた。

金朝、元朝の時代にも、女真族、モンゴル族の中から漢姓を受容する事例が多く見られた。金朝では女真族式と漢民族式の姓氏と名前を二重に使う場合があった。チベット系の王朝と見られる西夏でも王族が李氏を使用し、漢姓を受容していたことが分かる。しかし、西夏も一方では漢姓を使用しながら、一方では民族の固有の姓氏も多数使っていた。

中国最後の王朝であり、且つ異民族の王朝であった清王朝を建てた満州族は女真族に由来し、その姓氏も女真族の複音式を継承した。満州族は中国大陸を支配している間に、固有の姓氏を維持することに努め、貴族が姓氏を漢姓に改めることが禁止されていたという。この伝統はほぼ清王朝を通して維持されていたが、1911年の辛亥革命以後、ほとんどの満州族が漢姓に改めた。例えば、満州八大姓といわれる佟佳氏を佟氏、瓜爾佳氏を関氏、馬佳氏を馬氏、索綽多氏を索氏、齊佳氏を齊氏、富察氏を富氏、納喇氏を那氏、鈕祜祿氏を郎氏（一部を鈕氏）に改めた。

中国の歴史上では、漢民族の漢姓が周辺民族に受容されることが多かったが、遼・金・元など異民族の王朝において漢民族が異民族の姓氏を使用する事例も現れることがあった。その場合は異民族の権力者による漢民族への賜姓が多かった。

ここにおいて、中国周辺の異民族の固有、または独自の姓氏と漢姓との関係について論じたい。

中国周辺の異民族には、元は姓氏という概念が普遍的には存在せず、氏族・部族の名称に人の名前を連ねて使う場合が多かったと思われる。それが漢民族との接触の過程で氏族・部族の名称が姓氏として使われ、姓氏の概念が広がったと思われる。

『金史』『百官志』、『統通志』には、金朝を建立した女真族の民族固有の姓氏数十個が収録されている。この事実から女真族にはすでに固有の姓氏が存在していたことが分かる。女真族は中原地域に進入してから民族固有の姓氏と漢姓を二重に使うことになった。『金史』に付録されている「金国語解」には女真族の固有姓氏と漢姓との対応関係が多数示されていた。例えば、完顔を漢姓では王、烏古倫を商、徒単を杜、女奚を郎、兀浴を朱、蒲察を李、顔蓋を張などである。

女真族を継承した満州族には、清朝の時に編纂された『八旗満州氏族通譜』、『欽定皇朝通志』に姓氏が約650個程度収録されていた。この事実から満州族も多くの姓氏を持っていたことが分かる。

近代に入って満州族が民族固有の姓氏を漢姓に変更する時には、主に（1）民族固有の姓の最初の発音と同じ漢字、いわゆる諧音の漢字を充てるもの（温迪罕→温、完顔→王、抹顔→孟）、（2）満州語の意味を漢姓に直すもの（阿克占→猪→朱）などの方法を取っていたと言われる。

モンゴル民族は中国の漢民族と全く同じ概念の姓氏を持っていなかったと見られるが、モンゴル語でオボク（obok）と呼ばれる血縁共同体の氏族の出自、系譜を子孫に継承させる意識はかなり高かったと言われる。

内モンゴルでは漢姓を使うモンゴル族がいるのだが、その場合、漢姓の採用の方法は満州族が漢姓を採用する場合とかなり似ている。例えば、奇渥温（または乞彦）→奇、孛兒只斤（または博爾濟吉特）→包・宝、富格日特→富などがその例である。

中国周辺の異民族が漢姓を受け入れる場合、自民族固有の姓氏が存在する場合は、固有の姓氏と漢姓との葛藤・摩擦が存在していたはずであり、両者を二重に使う場合もあるが、自民族固有の姓氏を維持する努力もなされていた。清朝は満州族の貴族が漢姓を採用することを禁止していたし、中国の周辺民族の中で歴史上漢化政策を最も積極的に推し進めていた鮮卑族でさえ、漢化の推進者であった北魏の孝文帝の後、西魏では一時は漢姓を鮮卑族の固有の姓氏に戻す動きがあったのである。

中国の漢民族以外の周辺民族の姓氏に関する専門書は主に清代になって著された。清の張澍の『遼金元三史姓氏録』『西夏姓氏録』、周春の『遼金元姓譜』『代北姓譜』、錢大昕の『元史氏族表』、弘昼らの『八旗満州氏族通譜』などである。『西夏姓氏録』は西夏の162の姓氏についてまとめた書物であり、『代北姓譜』は北魏の姓氏についてまとめた書物である。『八旗満州氏族通譜』は満州の姓氏1,114の姓氏についてまとめたもので、満州の人物、種族の分布、民族関係、満州族の源流などについて調べる重要な文献でもある。

以上の文献からは、中国北方の異民族である鮮卑・契丹・モンゴル・満州の姓氏において、中国、朝鮮、日本のように多くの王族、貴族が祖先の源流を神話伝説に求める現象が明確に現れてはいない。即ち、以上の民族においては、姓氏の発生と神話伝説との関連性は明確には見出せない。同じ東アジアに

においても姓氏の発生過程において祖先の源流を神話伝説に求める現象は漢字文化圏に特に顕著な現象である可能性が高い、その背景には漢字文化圏に比較的濃厚な祖先崇拜意識があると言える。

3. 朝鮮の姓氏関連文献と姓氏の体系

朝鮮の姓氏の数は統計によって若干異なるが基本的に二百数十個程度である。朝鮮で最初に姓氏について体系的に整理した文献である『世宗実録』「地理志」(1454)には265個が記録され、その次の姓氏に関する体系的な文献である『東国輿地勝覧』(1486)には277個が記録されている。1930年の人口調査では韓国の姓氏が250個として知られ、韓国における2000年の人口調査では姓氏が286個、本貫が4、179個であった。

朝鮮の姓氏には、「本貫」という概念があるが、この本貫は始祖、または中始祖の出身地、または定着地に基づいて定めるので、同じ姓であっても氏族の発展過程で新しい本貫が多く生まれるので、姓氏の10倍以上に本貫が多いわけである。

朝鮮の文献記録に現れる有力な姓氏と姓氏の体系化は次の通りである。

『高麗史』(1451)に登場する人物を姓氏別に統計した資料によると、高麗王族と外国人を除き、官僚を多く輩出した16位までの姓氏の順位は李、金、崔、朴、鄭、王、尹、韓、柳、宋、張、安、洪、林、呉、権であり、間接的な資料であるが、これらの姓氏が当時の社会で有力であったことを裏付ける。

また、高麗時代前期の代表的な門閥貴族は、仁川李氏、慶州金氏、海州崔氏、開城王氏、平山朴氏、慶州崔氏、江陵金氏、貞州柳氏、水原崔氏、利川徐氏などである。

朝鮮で最初に姓氏について体系的に整理した文献である『世宗実録』「地理志」(1454)の「姓氏条」には、収録された265個の姓氏について、「天降姓」「賜姓」「土姓」「属性」「入姓」「投化姓」などに分類し、全国の姓氏を地域別に列挙している。この記録には当時の人口数による姓氏の順位は直接的には示されていない。『世宗実録』「地理志」(1454)以来、朝鮮における姓氏の区分は、「天降姓」(新羅・伽倻の王族の姓の「金」「朴」「昔)、「賜姓」(国王から賜った姓)、「土姓」(土着上流階級の姓)、「属性」(社会的地位の低い者の姓)、「入姓」(他所から移住してきた者の姓)、「投化姓」(外国から帰化した姓)に分け、中でも「天降姓」、「賜姓」を上位に置く傾向が見られた。「天降姓」は始祖の神話伝説と遡り、朝鮮において最も権威と由緒のある姓氏であり、「賜姓」は新羅の6部族の貴族に与えた李、崔、孫、鄭、裴、薛と高麗初期に建国者王建が与えた姓氏を主に指し、「天降姓」に次いで由緒のある姓氏である。この両者のカテゴリーに入る姓氏が朝鮮の大姓となることが多かった。中国の場合と同じく、朝鮮でも帝王と貴族に由来する姓氏は社会的に有力であり、姓氏の普及過程でそういう姓氏は人口増加に有利であった。

朝鮮王朝時代の官僚を務めた李宜顕(1669-1745)が著した『陶谷集』の「雑著編」に朝鮮の298個の姓氏について「著姓」「希姓」「僻姓」「複姓」の四つに分類した。ここで「著姓」とは人口数の多いか、社会的に影響力の大きい姓氏を、「希姓」「僻姓」とは人口数の少ない姓氏、「複姓」とは複字姓を指すものである。

「著姓」としてまず次の12個を上げている。

李、金、朴、鄭、尹、崔、柳、洪、申、権、趙、韓
次に「次之」としての「著姓」16個を上げている。

呉、姜、沈、安、許、張、閔、任、南、徐、具、成、宋、兪、元、黄

他にも、「又次之」としての「著性」25姓を上げているが、これらの中には現代の韓国の人口数の多い姓氏がすべて網羅されている。

4. 日本の姓氏関連文献と姓氏の体系

日本の古代の氏姓制度の確立期に編纂された『新撰姓氏録』（815）の姓氏と氏族の分類を調べてみると、日本の姓氏の特徴がよく反映されている。

『新撰姓氏録』には、当時の近畿地域の1,182氏族が「皇別」「神別」「諸藩」という三つのカテゴリーに分類され、「皇別」と「神別」に分類される氏族たちは日本の記紀神話の中の神々の子孫とされている。そして『新撰姓氏録』の中で「諸藩」に分類された外来氏族は当時の近畿地域の1,182氏族の中の約3分の1ほどである。

『新撰姓氏録』においては、当時の日本社会での実質的な地位と関係なく、記紀神話の神々の子孫とされる「皇別」「神別」に属する氏族たちを外来氏族より上位に位置させていて、古代日本の姓氏の体系の中で外来的なものより土着的なものに優越性を付与していたことが分かる。これは朝鮮の古代王族たちが中国式の漢姓を受容しながらも始祖たちの神秘的な誕生説話と関連させながら新しい姓氏を創製したのと似た性格を持つ。

『新撰姓氏録』の中で「諸藩」に分類された外来氏族は当時の近畿地域の1,182氏族の中の約3分の1ほどであったが、これらの外来氏族の姓氏を調べてみると、一部の王族たちが出身国の国名を姓氏として使用したか、一部が中国式の漢姓を使用した以外に、大半が当時日本で普通に使用された日本式の姓氏を使用していた。『新撰姓氏録』が編纂された9世紀の初めにはすでに日本の姓氏が中国式の漢姓と異なる体系を形成されていたことを物語る。

そして日本が基本的に中国式の漢姓を採用しなかった点、古代の土着貴族の起源を記紀神話の中の神々たちに帰結させている点を考えると、古代の日本で姓氏を創製していく過程で朝鮮のように事実と関係なく始祖たちの出自を中国に求める現象がそれほど一般化しなかったと判断できる。

日本では古代の王族、土着貴族の起源を記紀神話に求めたことが日本人の祖先意識に大きく影響を与え、平安時代以降から日本の有力な家系の多くが記紀神話の神々、特に天皇の子孫と名乗る現象が濃厚になっていった。

ここで、日本の時代別の有力な姓氏について調べることにしたい。

古代の氏姓制度の中で有力な氏族といえば、中臣、蘇我、大伴、物部、海部などである。

中臣氏は神職を職業とする豪族で、この氏族から伊勢、大田、^{おおよげ}大家、^{かどの}葛野など10数種の大族に分れ、鎌足が天智8年（669）に姓氏を藤原に改めると、藤原氏が他氏を圧倒して以後、平安時代まで権勢を振るった。

蘇我は土地を開拓し、農耕を中心とした豪族で、大和国高市郡の地名に由来し、物部氏を滅ぼして馬子の時代まで権勢を振るったが、大化の改新のときに滅んだ。蘇我蝦夷の弟倉麻呂の子などの傍系が後世にも栄えた。

大伴氏は天皇に随従する武族の出身で、物部氏、曾我氏と権力を三分にしたが、藤原氏が実権を握ると衰亡に向った。弘仁14年（822）に^{じゅんな}淳和天皇の諱を避けて大伴を伴氏に改めた。

物部氏は用具・武器その他の生産に従事した豪族で、蘇我氏とに対抗で物部守屋が蘇我馬子に殺されてから朝廷内で勢力を失った。

海部の原義は海と関連し、この氏族は海洋生活と関係があったようである。

平安時代以降になると、「源平藤橘」と呼ばれた源、平、藤原、橘の4氏族が政権の中核につき、この四つの姓氏から多くの姓氏が派生し、俗に日本人の系譜を遡れば、ほとんどが「源平藤橘」に行き着くといわれるほどである。武家社会においては大半の武士が「源平藤橘」の子孫と名乗ったため、近代に苗字が普及する過程で多くの苗字と家系図が「源平藤橘」と関連を持つようになった。例えば、織田信長が桓武平氏、豊臣秀吉が藤原氏の子孫、徳川家康が清和源氏の子孫を名乗ったことがその典型的な事例であり、この場合はいずれも詐称と見られている。

源氏は天皇家の分家が皇族を離れる際に賜った姓氏で、弘仁5年(814)に嵯峨天皇の皇子が「源」の姓を賜ったことに由来する。源氏は嵯峨天皇から生まれた嵯峨源氏以外にも、清和源氏、村上源氏など21の源氏流派が生まれ、源氏から派生した現代の日本の苗字は1000個以上とも言われ、大阪府、石川県、富山県に多いと言われる。

平氏は源氏誕生から少し遅れた天長2年(825)に桓武天皇の子孫が平姓を賜ったのに由来する。平氏も桓武平氏、仁明平氏、文徳平氏、光孝平氏などの流派があるが、桓武平氏が最も繁栄した。平氏と関連する現代の日本の苗字は東北に多いと言われる。

藤原氏は大化の改新の後、中臣鎌足が天智天皇から藤原姓を賜ったことに由来する。藤原氏は奈良時代にさらに四家に分家し、後に多数の苗字がこの姓氏から派生した。

橘氏は6世紀後半の敏達天皇の子孫にあたり、奈良時代の諸兄が祖である。橘氏は源氏、平氏、藤原氏に比べて子孫が少ない。兵庫県に関連する姓氏が多いと言われる。

日本の姓氏研究家丹羽基二氏が調べたところによると、現代日本の人口数の多い十大姓の佐藤、鈴木、高橋、伊藤、渡辺、斎藤、田中、小林、佐々木、山本のルーツが、藤原、源氏、平氏の流れを汲む場合が多く、さらに現代日本の人口数の多い百大姓もルーツも藤原、源氏、平氏に行き着く場合が多い。もちろん、これは血縁的なつながりのない場合が多数であり、名門貴族を羨望する社会現象の現われである。

日本の姓氏においては、天皇家に由来する姓氏が多く、また伝承上の始祖が記紀神話の神々に遡ることが多い。このような現象は、中国の漢民族の姓氏の主流が伝説上の三皇五帝に遡り、朝鮮の有力な姓氏が古代王国の神話伝説に遡るのと一脈相通する。東アジアの中国、朝鮮、ベトナムの方式に日本の国姓を求めれば、天皇家が国姓の大本ということであろう。

日本では古代において氏族の系譜が重要視されただけではなく、武家時代になってもそれぞれの家系が重んじられた。それで氏ごと、家ごとの系図類がたくさん作られ、そのような諸氏に伝来した系図を集めて、源流ごとに集大成したのが、『尊卑分脈』である。この書物は洞院公定(1340-99)によって企画され、公定一代の完成ではなく、洞院家の人々が継続して編集したものである。

『尊卑分脈』には、皇室から諸家にわたる家系が収められ、帝王系図から始まり、諸家系図が続く。『新訂増補国史大系』本によって、諸家の編成内容を見ると、藤原氏が圧倒的に多く、北家からはじまって摂家以下に多数の諸類を上げ、南家・式家・京家の順に続いている。次は嵯峨・仁明・文徳・清和・陽成・光孝・宇多などの諸源氏を並べ、中でも清和源氏に記録が詳しい。その次に桓武平氏以下の諸平氏が上がっているが、藤原氏・清和源氏に比べるとかなり少なくなっている。さらに橘・菅原・中臣・大

江・高階諸氏と宮家を掲げ、最後に略系の源氏・平氏及び清原・中原・小槻^{おつき}・和気・丹波・賀茂・安倍・紀・多治比^{たじひ}・物部・坂上・小野・蘇我の諸氏となっている。この書物には当時代の中央の名族がほとんど網羅されている。

『尊卑分脈』は『新撰姓氏録』以後の日本の姓氏・家系研究の基本文献であるが、ここでも天皇家とそれと関連する、平安時代以降に「源平藤橘^{げんぺいとうきつ}」と呼ばれた源、平、藤原、橘の4氏族が武家社会においても姓氏の主流を成していたことが分かる。

参考文献

- 巫聲恵編著『中華姓氏大典』(河北人民出版社、2000)
- 伝永和『姓氏典故』(遼寧教育出版社、1995)
- 清・張澍撰、雪堂叢刻『西夏姓氏録』(芸文印書館)
- 清・周春『遼金元姓譜』(中国哲学書電子化計画 <http://library.ctext.org/>による)
- 清・周春『代北姓譜』(中国哲学書電子化計画 <http://library.ctext.org/>による)
- 『影印本・八旗満州氏族通譜』(遼海出版社、2002)
- 崔徳教・李勝羽編『韓国姓氏大観』(創造社、1985)
- 李樹建著『韓国の姓氏と族譜』(ソウル大学校出版部、2003)
- 『李朝実録別冊・世宗実録地理志』(学習院東洋文化研究所刊、1957)
- 『影印標点・韓国文集叢刊181—陶谷集II』(景仁文化社、1999)
- 『新增東国輿地勝覧(全4巻)』(国書刊行会、1986)
- 太田亮著『姓氏と家系』(創元社、1941)
- 『日本姓氏家系総覧』(別冊歴史読本・事典シリーズ第11号)
(新人物往来社、1991)
- 『日本を知る姓氏と苗字』(別冊歴史読本20号)(新人物往来社、2002)
- 豊田武著『日本史小百科<家系>』(東京堂出版、1993)
- 佐伯有清著『新撰姓氏録の研究<本文篇>』(吉川弘文館、1962)
- 佐伯有清著『新撰姓氏録の研究<研究篇>』(吉川弘文館、1971)
- 『新訂増補国史大系—尊卑分脈(新装版4巻)』(吉川弘文館、2001)